香川大学

平成二十八年度

問題冊子

教科目	ページ数
国語	14

試験開始の合図があるまで、問題冊子を開かないこと。

解答の書き方

1. 解答は、すべて別紙解答用紙の所定欄に、はっきりと記入すること。
2. 解答を訂正する場合には、きれいに消してから記入すること。
3. 解答用紙には、解答と志望学部及び受験番号のほかは、いっさい記入しないこと。

注意事項

1. 試験開始の合図の後、解答用紙に志望学部及び受験番号を必ず記入すること。
2. 問題の内容についての質問には、いっさい応じないが、その他の用事があるときは、だまって手をあげて、監督者の指示を受けること。
3. 試験終了時には、解答用紙を机上の右側に置くこと。
4. 試験終了後、問題冊子は持ち帰ること。

〔1〕 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

ヴァーチャル・リアリティを問題にしたＳＦ映画に『マトリックス』がある。主人公は平凡な日常の中で、突然見知らぬ者たちからアクセスされる。彼らに従って、真実に目覚めるというピルを飲むと、この現実と思われていたものすべてが、コンピュータによって巧みに上演された幻想に過ぎず、実際には人間は、巨大コンピュータに神経を接続されたまま、水槽の中で眠らされてその幻想を夢見ているにすぎなかった事がわかる。真実に目覚めた少数の人間たちが、このコンピュータの支配に闘いを㋐イドんでいるわけである。

ここで面白いのは、彼らの闘いの眼目が夢見る人間たちを覚醒させることにある以上、外からコンピュータを破壊するようなことが問題ではなく、コンピュータの回路（マトリックスと呼ばれる）の中に入り込んで――という事は各人の夢の中に入り込んで、その意識に働きかけねばならないという点である。そのため彼らは様々の危険を冒して、さながらコンピュータウィルスのように回路に侵入し、なお夢に㋑コシュウしている人々に覚醒を促さねばならない。他方コンピュータの方では、それに対抗する免疫機構のようなものを自らの中に作り出し、彼らを追及し撃破しようとするわけだ。

ここで、リアルな世界とヴァーチャルな世界を本当に区別するものがいったい何か、という問題が生じる。コンピュータと闘う人間が、コンピュータにつながって夢を見ている人間と違って現実に触れていると思えるのは、彼らがヴァーチャルな世界をいわば巨大なテクスト〈注1〉とみなし、その任意の場所に「外」から侵入することができるからである。彼らの侵入は、テクストを切ったりつないだりする解釈的介入に他ならない。つまり彼らにとって、この日常世界は一つの夢というテクストであり、その意味を支配する魔法にかけられているようなものだ。この魔法は解かれねばならぬもの、少なくとも別の魔法によって別の意味を帯び得るもの、つまりは解釈によってまったく別様の読解も可能なものなのだ。

①実在と意味をぴったりと一体化したように見ている人にとっては、すべては議論の余地なく明瞭なものに見える。『マクベス』にあるように、「きれいが汚い、汚いがきれい」となることもないし、ハムレットが言うように、ラクダに見える雲が時にはイタ

チにも、またクジラにも見えるということもない。しかしそれは単に、彼が支配的解釈の魔法(イデオロギー)に完全に捕らえられているからにすぎない。しかし「たがが外れた世界」においては、ネズミが王になったり、道化が知者になったりするのである。だから「この世界」の実在を固く信じる人々がコンピュータの夢の奴隷でしかないのに対して、それを一つのテクストにすぎないと見ることのできる者だけが、つかのま真実に触れる自由を得るわけだ。

すると、現実の世界への覚醒と見えたものは、結局「この世界」(ヴァーチャルな世界)への解釈的介入がもたらした効果(仮象)に過ぎないと言えるのではないか？　つまり、ヴァーチャルな世界を離れて、そこへと覚醒すべき確固とした現実があるわけではないのだ。むしろこの世界を現実そのものと固く信じて疑わない態度そのものが、あらゆる幻想の実体とも言えよう。それが証拠に、コンピュータの夢から覚醒した者も、それがもう一つの夢でないという確証は、それだけでは得られないだろう。我々の経験の中には、これこそが疑いもなく現実の経験だという確証を与えてくれるようなものは、何一つないのである。それゆえ、回路に侵入してイデオロギー闘争を闘う者たちも、自らの確信を正当化できる絶対の合理的根拠が欠けており、そのため夢の中にまどろむ人々への説得も、単に理性的ではあり得ない。むしろ、この確信はいったん疑い始めると、いたって脆(もろ)いものだということがわかる。確信に基づく次なる行動と決断のみが、そのつど更なる確信を生み出すのであり、逆にいったん受動的に証拠をかぞえ始めると、たちまちすべては夢と区別がつかなくなってくるだろう。「十分な理由」はどこにもない。あらゆる理由は不十分であり、あらゆる推論は決断である。

実は、映画の主人公がピルを飲むとき、赤いピルと青いピルが目の前に示される。青いピルを飲めば、これまでどおりの生活にそのまま戻れるが、赤いピルを飲めば真実を知ることになると言われるのだ。果たして赤いピルが本当に真実を知らせるものなのか、なんら理性的説得はない。ただ決断が求められるのである。これは宗教的決断のようなものである。信じる決断をした人にだけ見えてくる「真実」があるのだが、決断に先立ってそれは知られ得ない。コンピュータ回路の中での説得は、このように宗教的決断への誘惑に似ている。

それを悪魔の誘惑(試み)と区別するものはいったい何か？ ②これは難しい問題だが、おそらく決断の有無ということ自体が、二つを分けるのであろう。つまり、悪魔の誘惑に乗ることは、一見すれば決断のように見えるものの、実はなんら決断ではなく、従来のイデオロギー(夢)への復帰でしかないのに対し、「真実」への決断の真実性は、それが本当の決断である点にある。

「決断」については、誤解されていることが多い。AかBか(Aか非Bか)いずれも決断し得るものと思われよう。しかし、本当はいずれか一方だけが本当の決断であり得、他方は単に決断の回避でしかないのだ(両方が決断の回避である場合もある)。一九一八年レーニンは対独戦争の単独即時停戦を決断した(ブレスト＝リトフスク講和)。この決断に反対していた他のボルシェヴィキたちの主張は、一見すると別の選択肢のように見えるが、実際には単に決断の回避でしかなかった。決断とは、それが為されてみて初めて、実際にはそれ以外の決断があり得なかった事が認識されるようなものなのだ。これが決断の事後的効果である。認識はおしなべて決断の事後的効果としてのみ与えられるのであり、決断を回避する者には決して与えられない。決断を回避するという誤った「決断」をした者たちにとって、事態は相変わらずあいまいなまま仮象の可能性を帯びたままであり、己れの不決断の本質が見えないのに対し、決断した者のみが事後的に己れの決断の真の意味を認識するのだ。幾何学の証明において、適切なホジョセン(ウ)は、それが引かれてみて初めて適切なものだったことがわかるようなものである。

かくて決断した人間のみが現実に直面する。それ以外の者は、ただイデオロギーの水槽の中で相変わらず夢を見ているだけなのだ。言い換えれば現実とは、ただ決断の瞬間にだけひらめき現れるもの、ある魔法からもう一つの魔法への転換の一瞬にだけ輝く自由に対して、ほの白く浮かび上がるものなのである。

このように、我々のリアリティを支えているものが実際には理性ではなく信仰であり、信仰への決断であるということは、我々にめまいのような感覚を与えるかもしれない。我々の決断は、事前に何のよりどころも与えられていない盲目のヒヤク(エ)であらざるを得ないのだろうか？

理性的・理論的には確かにそう言うしかあるまい。しかし『マトリックス』は、それ以外の支えを用意している。それは信仰のひな形(マトリックス)とも呼ぶべきものである。主人公は、「コンピュータとの闘争のために選ばれた救世主がいつか現れる」という「預言」に

よって呼びかけられている。本人にも周りの人間にも、彼こそがその者であるという確証は与えられないが、この呼びかけを自分へのメッセージとして受け取り始めるにつれて、この問いかけが次第に確信へと変化し、そのことが彼を実際に救世主へと導き始める。そして〈注2〉ついに、「奇跡」はピエタの形象（マトリックス）の中に受胎するのである。

我々には、はっきりした根拠は相変わらず与えられていないが、にもかかわらずこのように未来への行動のひな形のようなものが、いくつか与えられているのである。愛とか自由とか正義……これらは、それを信じることによってしか、その中へと我々を招じ入れることはない。我々がそれらを理解するには、根拠も支えもないまま前のめりにそこへと半ば身をゆだねなければならず、もはや何の支えもなく空間へと身を投げ出した瞬間――そのとき初めて、我々が信じることによって分かち与えた力が、〈注3〉中空に浮いた我々の足場を支えるために、熾（し）天使のようにはせ参じるであろう。かくして我々はかろうじて踏みこたえ、暗闇に㋔ホウラクすることを免れるわけである。このような不安に耐えかねて、何らかの理論とか組織とか、財産や前例に支えを求めても、結局は無駄だろう。その意味で、③我々の自由は信仰の中にしかなく、我々の信仰は自由の中にしかないのである。

（田島正樹『正義の哲学』）

〈注〉
1　テクスト―テキスト（文書）。言葉によって編まれたもの、という含意を持つ。
2　この箇所についての筆者の注は以下の通りである。「映画を見ていない人のために注記しておくなら、私がここで示唆しているのは映画の末尾で倒された主人公ネオを抱き上げるトリニティーの姿が、ミケランジェロのピエタ像をなぞっているということである。」トリニティーとは、救世主とみなされた主人公の同志である女性の名であり、ピエタ像とは、十字架からおろされたイエスを抱き上げるマリアをモチーフにした像のことである。
3　熾天使―天使の位階の最上にある天使。神への愛で体が燃えているため、熾（燃える）天使と呼ばれる。

問一　傍線部㋐～㋔のカタカナを漢字に直せ。

問二　傍線部①とあるが、なぜそう言えるのか、筆者の考えに即して説明せよ。

問三　傍線部②とあるが、なぜ筆者は「難しい問題」とみているのか、理由を説明せよ。

問四　傍線部③とあるが、どういうことか。文章全体の文脈を踏まえ、詳しく説明せよ。

〔2〕 次の文章は、宮本百合子「播州平野」の一節である。主人公のひろ子は、終戦直後、東北から夫の郷里である中国地方に向かおうとしている。これを読み、後の問いに答えよ。

運よく、その列車の中でひろ子は座席がとれた。

その代り、坐ったと思ったらもう動けなくて、送って来た小枝(さえ)に声さえかけられなかった。

駅を出るとじき、通路にまで立っている旅客をかきわけて、

「検札をいたします」

中年の大柄な車掌が、巻ゲートルで入って来た。

「これは二等車ですから、乗車駅から三倍の賃銀を払って頂きます」

そういう声につれて、後部で押し問答がはじまった。押し問答の尾をひいたまま、ひろ子のところへ来た。切符を出して見せた。鉛筆で切符のうらにしるしをつけて、先へ行くかと思ったら骨っぽい指をのばして、

「それは御使用ずみか?」

と、ひろ子が手にもっていた裂地(きれじ)づくりの紙入れをさした。その意味がすぐのみこめなくて、ひろ子は、見せた切符を挾んでおいた黄色い内側を開けたまま、

「どれかしら」

「これは御使用ずみですか」

同じ切符入れに挾んであった山の手線のまだ使ってない切符をぬきとった。そして、ぼんやりしたひろ子が、一言も云(い)わないうちに、

①「頂いておきます」そして、次の番へ移った。

也。故(ニ)妖孽(ハ)不レ勝(タ)二善政(ニ)一、悪夢(ハ)不レ勝(タ)二善行(ニ)一也。至治之極(ミ)、禍反為(ツテル)レ福(ト)。故(ニ)〈注11〉太甲曰(ハク)、⑤「天作孽(ノセル)、猶可(ホシ)レ違(さク)、自作孽(ノセル)、不(ト)レ可(カラ)レ逭(のがル)。」

（『説苑』）

〈注〉 1 殷王帝辛—殷王朝の王・紂のこと。 2 工人—占い師。 3 亢—強。 4 至殷王武丁之時—殷王武丁は殷王朝の王名。〈注1〉の紂王に先行する王であり、ここに「至」というのは不審。 5 桑・穀—植物の名。くわとこうぞ。 6 朝—朝廷。 7 大拱—一抱えもある大きさに成長した。 8 側身—身を慎しむ。 9 挙逸民—在野の賢人を取り立てる。 10 妖孽—わざわい。 11 太甲—『書経』の篇名。

問一 傍線部①を書き下せ。

問二 傍線部②とはどういうことか。その指し示す具体的な事実に即して説明せよ。

問三 傍線部③は、どういう事実によって、何を描出しようとしているのか、説明せよ。

問四 傍線部④と反対のことを言っている部分を文章中より抜き出し、その始めと終わりの三字をそれぞれ書け。ただし句読点や送り仮名は含まない。

問五 傍線部⑤をわかりやすく口語訳せよ。

〔4〕

次の文章を読んで、後の問いに答えよ(設問の都合で、送り仮名を省いたところがある)。

存亡禍福、皆在レ己而已。天災地妖、亦不レ能ハ殺ス也。昔者殷王帝辛之時、①爵生烏於城之隅。〈注2〉工人占レ之ヲ曰、「凡小以テ生レ巨ヲ、国家必ズ祉、王名必倍。」帝辛喜ビ爵之徳ヲ、不レ治メ国家ヲ、〈注3〉亢暴無レ極マリ、外寇乃チ至リ、遂ニ亡ス殷国ヲ。②此レ逆ヒテ天之時ニ、詭レ福ニ反ツテ為レ禍ト也。〈注4〉至リ殷王武丁之時ニ、先王ノ道ケ欠、刑法弛ミ、〈注5〉桑・穀倶ニ生ジ於朝ニ、〈注6〉七日ニシテ而大イサナリ拱。工人占レ之ヲ曰ハク、「桑・穀者ハ野物也。野物生ズルハ於朝ニ、意ニ朝亡ビンカト乎。」武丁恐シ駭、側ソバダテレ身ヲ修メ行ヒ、思ヒ昔ノ先王之政ヲ、興シ滅国ヲ、継ギ絶世ヲ、挙ゲ逸民ヲ、明ラカニス養老之道ヲ。三年之後、③遠方之君重ネテレ訳ヲ而朝スル者六国アリ。④此レ迎ヘテ天之時ヲ、得テレ禍ヲ反ツテ為レ福ト也。故ニ〈注10〉妖孽者ハ、天ノ所ニ以イマシムルレ警ニ天子諸侯ヲ也。悪夢者ハ、所ニ以ムルレ警ニ士大夫ヲ

そのころ、地方新聞は不正乗車の激増を大きく扱っていた。ひろ子の乗った駅から小一時間先の大きな駅では、毎日二百人以上の不正乗客があって、それは益々増加しつつある、と書かれていた。この列車は、その都会が始発である。車掌は気を立てている。いかにも過労らしい、肉のつくゆとりのない肩のあたりで制服は色あせている。この車掌が、山の手線の切符に対してまで責任を負う必要があるのかないのか分らなかったが、ひろ子はむしろ車掌の癇癪に同情した。鉄道従業員たちは、機銃の恐怖の中であれだけの努力をしとおした。復員、進駐と、その後㋐寸暇も与えられていないのであった。

ひろ子の斜隣りで、二十歳をすこし出たばかりの海軍士官の外套を着た神経質な顔つきの男が、まだ少年の丸い顔をした部下らしい青年をつれて大荷物をもちこんでいた。それが、紙片を出して問答している。

車掌は紙片をとり上げて、前進した。この間に、さっき後部で開始された㋑悶着の相手が車掌に追いついて来た。

「おい、車掌さん。そんなへちがてえことを云ったって、一文だってお前の得になるわけじゃあるめえし、いいだろう？　たのむぜ」

国防服の前ボタンをすっかりあけはだけて、シャツの胸を見せている巻ゲートルは、狎れ狎れしい大声を出した。

「おい、車掌」

車掌は、背中に平手うちでもくらったように素早く振り向いた。

「車掌、とは何です！　はじめっから私の損得で云っているんじゃありません。鉄道省の規則がそうだから、その規則通りにしなければならないんです」

「いいじゃねえか。どうせこんな滅茶苦茶な世の中になっちまって、今更二等も、へったくれもあるもんか」

「こんな世の中になったから、なお更キチンとしなけりゃならないんです。勅語は何のために出たんです！」

ひろ子は、乗り合わせたこの列車が、ただの列車でなかったことを知った。②これは、明らかに一種の潰走列車である。斜隣りの海軍士官がどこかへ立って行って帰って㋒暫くすると、再び車掌が入って来た。荷物をまたぎまたぎ来て、その若い士官の横に立った。

「じゃ二百八十三円頂きます」

大股をひらいて座席にかけたままむっとした面持(エ)で、蒼(あお)い顔の若い士官は大きい紙幣入れをひらき、新しい十円札をつかみ出すようにして車掌に渡した。その代りとして紙片がかえされた。

「これで事務が片づきましたから申しますが、さっきの雑言(オ)は、あれは、どういうわけです」

ぎごちなく神経のこわばった若い士官は、こんな情況になることとは予想もしなかったらしく、剣相な上眼づかいで、低く何か答えた。

「生意気だ、気にくわん、とおっしゃるが、私のどこに生意気な挙動がありました。不正乗車をしているのは貴方です。私は車掌として事務をとっただけじゃないですか。ひとこと罵倒でもしましたか。じき手続きをして上げますと云っただけじゃありませんか」

言葉にもつまるという激昂(げきこう)で、車掌は青年士官を睨(にら)まえた。士官の方も、もう一ヵ月前ならばと文字に読まれる形相で睨み上げている。その面上につばきするように車掌が云い捨てた。

「あなたのようなのが軍人だから、日本は潰れたんだ！」

③ひろ子は、どちらの顔も見ていられなかった。

その若い士官の前には、襟章(えりしょう)をもいだ制服の陸軍将校がかけていた。となりには、東北のどこかの大きい軍需会社が解散して、東京へ還る途中らしい国防服だが、重役風の男がいる。ひろ子の真前にいるのも陸軍の古参将校で、制服の襟章がはぎとられている。

騒動がしずまって見渡した車室は、網棚から通路から座席の間まで詰めに詰めた大荷物で、乗っているのは男ばかりであった。何かの角度で、軍と関係があったと見える風体の男ばかりであった。女と云えば、ひろ子のほかには子供づれの細君が一人乗り合わしているきりである。

東北の自然の間を、列車は東京に向って進行した。ときどき、迷彩代りに、車体へ泥をぬたくったままの列車とすれ違った。復員兵と解除になった徴用工とを満載した有蓋貨車、無蓋貨車とすれ違いながら那須の荒野にかかった。

線路のすぐそばから灌木の茂みが乱暴にきり開かれて、木の色の生新しいバラック風の大建物が、幾棟も、幾棟も、林の方へ連っている。それらはいま無意味そのもののように、愚劣そのもののように、がらんとして九月の西日に照らされている。

「これだけだって、ちっとやそっとの無駄じゃない」

ひろ子の向い側の中老人が呟いた。

「うけ負った奴は、さぞふんだくったんだろうなあ……」

並んでかけている将校の視線も、その尨大な濫費物の上に止っていた。しかしその視線は空虚である。中老人は、黙りこんだ。列車は、単調に動揺し車輪の音をたててていよいよ東京へ近く進行する。

車室にはぎっしり人間が乗っていた。けれども互いを貫くたった一つの共通な気分も興味も示されていなかった。みんながてんでんばらばらであった。めいめいが自分自分にかかずらい、急に変化した自分の利害と見とおしとにかかずらっている。

海軍士官のとなりの重役風の人物は、事業で損をしなかった人物の円滑さで、向い側の陸軍軍人に、折々四方山ばなしをしかけた。

「神田辺はのこったそうですな。これで、少しはいい本も出るもんでしょうか」

軍人は上眼づかいで、

「さあ……」

それぎりてんでとり合わない。話はそのまま消えてしまった。ずっと先に、白い毛糸の長靴下、しゃれた白い毛織の短ズボン、白の上衣、臙脂色のネクタイをつけ、一目して相当な地位の「南方関係」の男がいた。瀟洒としたその服装と丸顔の上にある不機嫌さは冷酷できたないものの中へ自分が落ちこんだという眼つきで車内の混乱を傍観している。

〔3〕 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

いとをかしうあはれにはべりしことは、〈注1〉この天暦の御時に、a清涼殿の御前の梅の木の枯れたりしかば、求めさせたまひしに、なにがしぬしの蔵人にていますがりし時、うけたまはりて、「若き者どもはえ見知らじ。きむぢ求めよ」とのたまひしかば、一京まかり歩きしかども、はべらざりしに、西京のそこそこなる家に、色濃く咲きたる木の、様体うつくしきがはべりしを、掘り取りしかば、①家あるじの、「木にこれ結ひつけて持てまゐれ」と言はせたまひしかば、あるやうこそはとて、持てまゐりてさぶらひしを、「なにぞ」とて御覧じければ、女の手にて書きてはべりける。

b勅なればいともかしこしうぐひすの宿はと問はばいかが答へむ

とありけるに、あやしく思し召して、「何者の家ぞ」とたづねさせたまひければ、②貫之のぬしの御女の住む所なりけり。「遺恨のわざをもしたりけるかな」とて、あまえおはしましける。重木、今生の〈注2〉辱号は、これやはべりけむ。さるは、「思ふやうなる木持てまゐりたり」とて、衣かづけられたりしも、④辛くなりにき」とて、こまやかに笑ふ。

（『大鏡』）

〈注〉 1 天暦の御時—村上天皇の御代。 2 辱号—恥辱・はじ。

問一 傍線部a・bの読みを記せ。読みの表記は、現代仮名遣いでよい。

問二 傍線部①。「家あるじ」は、どのような思いを込めて、こうした行動をとったのか。問題文全体を踏まえて説明せよ。

問三 傍線部②を口語訳せよ。

問四 傍線部③の人物は、著名な文学作品を残し、歌集の編纂にも関わった。この人物の姓名・文学作品名・歌集名を漢字で記せ。

問五 傍線部④。なぜそのように思ったのか、推測される事情を説明せよ。

④ ひろ子は、七月の下旬、上野から乗って東北に向った夜行列車の光景を思い出した。混雑は名状出来ず、女は本当に悲鳴をあげた。ひろ子は、人波に圧されて押し込まれ、通路の他人の荷物の上で一夜を明かした。しかし、その騒ぎは、同じ空爆を蒙る恐怖に貫かれ、事なかれと願う単純で正直なすべての旅客の希望で一致していた。

「いい月夜になったねえ。お月見にはもって来いだが、ちいと薄気味がよくないねえ」

「小山まで無事に行ったらね」

「ナニ、案ずるより生むがやすいってね」

流行唄を謡うものがあったりした。ひろ子のわきで、若い女と膝組みにもまれこまれた父親の好色めいた冗談を、その娘が、

「いや、父さんたら。黙ってなさいってば！」

しきりに小声でたしなめていた。煎り大豆を、わけて食べたりしてひろ子も運ばれて行った。

今の列車では、万端が全然ちがう。ひろ子の座席の背中に肱（ひじ）をかけて立っている二人連の襟章なしの男たちが、聞かせたそうに、さり気なく大声に喋（しゃべ）っていた。

「おい、山田に会ったか」

「彼奴はのこるんだろう」

「そんな筈（はず）はねえんだが――奴、要領つかいやがったな」

何と何とで、と、ひろ子にききとれない軍用語で数えた。

「俺あ、八千円とちいとばかり貰（もら）った」

「そうなるか……フム、まあ悪かねえなア」

東京の外郭にある駅へ来たとき、ひろ子は窓からやっと下りた。その拍子に力をかりたカーキ服の男の腕に目がとまった。その男の白い腕章には英語でミリタリ・ポリスと書かれていた。

問一　傍線部㋐～㋔の漢字の読みをひらがなで書け。

問二　傍線部①について。この行動から、車掌のどのような感情が読み取れるか。簡潔に述べよ。

問三　傍線部②について。「一種の潰走列車」とは、この列車がどういう状態であることを言っているのか。わかりやすく説明せよ。

問四　傍線部③について。なぜ、「見ていられなかった」のか。わかりやすく説明せよ。

問五　傍線部④について。七月下旬の列車と、この列車の状況とはどのような点が異なっているとひろ子は感じているのか。簡潔に説明せよ。